

2021年4月25日 久宝教会 復活節第4主日礼拝

メッセージ「愛・死・会い、愛を知る」

岡嶋千宙伝道師

聖書 ヨハネの手紙Ⅰ 3章16-24節

3週間前の4月4日、私たちはイエス様の復活を祝うイースターの喜びを共にしました。教会の暦では、週報にもあるように、本日はまだイースターの時期で、復活節第4主日とされています。今年は、去年に引き続いてコロナウイルス感染拡大の影響で、集うこと、共にいることが難しくされ、イースターの喜びも半減しているように感じられます。先日、京都教区の教会関係者の集いがあり、そこでも、コロナ禍で集うことが困難とされる中で、それぞれの教会が様々に痛みや困難を抱えている現状が分かち合われました。痛みや困難の感覚、それは、喜びと結びつくイースターとは相容れないもののように思えます。ですが、実は、イースターとは、初めから痛みや困難を伴うものだったことが、聖書の記述からも見て取れます。イエス様が復活された後の時期というのは、例えば、エマオの道筋で復活のイエス様に出会った二人の弟子や、実際に復活したイエス様の姿を見るまでは他の弟子たちを信じなかったトマスなどに明らかなように、喜び、というより、むしろ、驚きや混乱、困惑に溢れていました。

本日の御言葉が記されている『ヨハネの手紙Ⅰ』。おそらく、この手紙で最もよく知られているのは、「神は愛です」というフレーズだと思います。4章8節と16節と、手紙の中で2度にわたって語られている言葉。これに象徴されるように、本書には「愛」が溢れています。ですが、この「愛」という言葉は、先ほど述べたような、イエス様の復活後の社会に広まっていた混乱の中で語られたものだというのを、念頭においておく必要があります。手紙の冒頭部分、1章5-10節には、「光」に対して「闇」、「真理」「真実」に対して「うそ」「偽り」「欺き」、といった、対立する二つの言葉が並列で、矢継ぎ早に語られています。これは、この手紙が書かれた背景には、手紙の著者（仮にヨハネとします）が属していた共同体「ヨハネ教会」が、内部に混乱や困惑、それゆえの争いや対立を抱えていたことを暗示するものです。対立の争点は、「自分たちはなぜ共に生きていくのか」、「自分たちを一つの教会として結びつけているものは何なのか」、「自分たちの人間関係を成立させ維持させていくものはいったい何なのか」、という問いでした。

ヨハネ教会がおかれていた当時の社会情勢は、一方に、ローマ帝国、他方に、伝統的なユダヤ教の影響が強く及んでいました。ローマ支配下における人間関係の中心は、権力、財力、地位、身分でした。財力や身分をもとにして権力を保持し、その権力を用いて、自分の地位を築き上げる。もちろん、財産や力のない者は、社会の底辺におかれ、厳しい生活を強いられます。それに対して、伝統的なユダヤ教の考えでは、律法の遵守や宗教祭儀の執行が大切にされ、日常の隅々にわたって張り巡らされた細かい規則を守れない者は、社会からはみ出した者として周縁に追いやられていました。ヨハネ教会が、自分たちの人間関係の礎として据えたもの、それは、ローマの慣習でもなく、伝統的なユダヤの教えでもありませんでした。財力／権力／地位／身分でもなく、律法遵守や宗教祭儀でもない、別の人間関

係のあり方。それは、イエスを中心とした共同体です。

手紙の中で、そのイエスを描写する特徴的な言葉が、二つあります。一つは、4章10節「イエス・キリストが肉となって来られた」。もう一つが、本日の御言葉の中にある3章16節「イエスは、わたしたちのために、命を捨てた」。一人の人として、生身の身体を持って、人の間に生き、人の間で死んでいったイエス。そのイエスが十字架で処刑されたのは30年頃、この手紙が書かれたのは90年代もしくは100年代と考えられていますから、イエスが死んでから60年ほどの時間の隔てがあります。なぜ、生きた人ではなく、死んだ人なのでしょう。百歩譲って、死人でも良い、というのであれば、ユダヤの歴史の中で、イエス以外にも、すでに死んでいる偉大な人物はたくさんいます。アブラハム、モーセ、ヨシュア、サムソン、エリヤ、ダビデ、ソロモン、ヨシア、など、挙げればきりがありません。数多くいる偉大なユダヤ人の中で、なぜ、イエスなのでしょう。

本日の御言葉として与えられている『ヨハネの手紙』、および、同じ教会に属している者によって書かれたとされる『ヨハネによる福音書』に共通して頻繁に用いられるいくつかの言葉があります。その一つが、「愛」です。マタイ／マルコ／ルカ／ヨハネの4つの福音書を比較してみると、共感福音書と呼ばれるマタイ／マルコ／ルカにくらべて、ヨハネ福音書では「愛」の頻出度が高く、ヨハネの手紙に関して言えば、「愛」という名詞と、「愛する」という動詞が合計で45回用いられています。これは、新約に収められた一つの書物としては、圧倒的な多さです。使用頻度が高いだけではありません。特に、福音書の比較によって明らかになりますが、神やイエスが愛である、とする発想、または、信仰者が互いに愛するという愛の実践を強調するのは、ヨハネに独特なものです。ヨハネ教会にとって、「愛」とは、神の救いの業を語り伝える際に、なくてはならないものでした。その愛が、イエスによって体現された、わたしたちに示された。死を迎えたとしても衰えない、イエスの生き様。いや、死を通して、よりいっそう鮮明にされるイエスの命の軌跡。死を含めた、命の全行程を生き抜いたイエスの姿に、愛が体現されていた。そう信じた手紙の著者ヨハネは、イエスによって示されたその愛を、自分たちが共に生きていくための礎として据えたのです。

本日の御言葉、3章17節には、「世の富を持ちながら、きょうだいが貧しく困っているのを見て、憐れみの心を閉ざす者があれば、どうして神の愛がその人の内にとどまるでしょう」という言葉が記されています。これは、手紙の中で、ヨハネ教会に敵対する者を批判して語られたものです。この言葉の裏を返すと、イエスが示した愛とは、そのようなものではなかった、ということになります。困っている人、生きるために何かを必要としている人、弱さを覚えている人、重荷を負っている人、そういう人たちに寄り添う、心を開く、共にいる、共に生きる。異国の人であっても、病気を患った人であっても、社会から見放された人であっても、自分と違う者であったとしても。

ヨハネ福音書には、たとえば、9章の生まれつき目の見えない人の癒しなど、イエスの行った奇跡の業がいくつか描かれています。ヨハネ教会では、そのいずれもが、「きょうだいが貧しく困っている」状態に対して、イエス

が憐れみの心を開く行為、つまり、イエスの愛の行いであるという理解が共有されていたのだと思われます。それら一つ一つの業が、イエスを十字架への死へと近づけさせていく出来事であった。イエスは自分の命が途絶えさせられることを知りながらも、必要なものに事欠く人々に対して、心を開くことを決して止めはしなかった。だからこそ、「イエスは、わたしたちのために命を捨てたのだ」、そして、そこに「愛が示され、わたしたちはそれにより愛を知ったのだ」(3:16)。

毎度のことなのですが、教会でのお話しの準備をしていると、机の前に座って、手前に聖書をおき、左右に注解書を広げながらパソコンの画面を見つめるだけで何もできない、ということがままあります。今回も、行き詰まって、投げ出したくなって、ふと目をそらした先に見えたもの。それは、わたしが関西学院大学で学んでいた際に指導教員であった榎本てる子先生の言葉でした。

「私にとっては人が宝でした。本当に人ってというのは、愛されて愛していくなかで生きていくんだなって。そういうコミュニティーをわたしはもらえてすごい感謝ですけども、色んな人たちが、やっぱり一人ひとりが、そのコミュニティーを求めてると思うので、色んな人たちが自分たちの場で、愛して愛されるコミュニティーっていうものを創っていつてもらえたらなっていうのを、何かそれを、すごく思ってもらいました。」(榎本てる子、2017.9.23 Go-Go Partyにて)

これは、榎本先生、わたしたちは親しみを込めて、「てるちゃん」と呼んでいたのですが、そのてるちゃんが、56歳で亡くなる半年ほど前、彼女の誕生日を祝うパーティの席で語った言葉です。

てるちゃんは「愛」に生きた人でした。てるちゃんにとって、「愛」とは、わたしが知る限りですが、先の言葉に記されているように、人との交わりだったのだと思います。関学のてるちゃんのお部屋は、大学の研究室らしからぬ雰囲気、いつも誰かが、「研究」ではなく「遊びに」あるいは「人生相談」をしに行っていました。冗談で、「先生の部屋は、『徹子の部屋』ならぬ『てる子の部屋』やねー」と良く言っていたものです。授業のとき、授業以外の時、大学で、大学の外で、必要であれば、求める人たちのそばに何時間でもいて耳を傾けてくれました。授業の最中に、「なあなあ、お腹減らへん？ケンタッキー買ってくれへん」とか、「次のゼミのときは、ピザ注文せえへん？」と言って食事を共にしてくれました。大学の外でも広い交友関係を持っていて、授業の講師として学外からゲストを呼んで学生と出会わせてくれたり、授業でなくても、必要であれば、学外の人と学生とが出会う場と時間を創ってくれたりしました。人と共にいることが好きで、人のことをよく見て、よく聞いて、よく触れ合っていたてるちゃん。わたしにとって、てるちゃんは、愛を与えてくれる人、愛してくれる人でした。その反対、「愛される」ことについて、亡くなる5日前に、てるちゃんは次のような言葉を記しています。

「この2ヶ月間治療共同体の中でたくさんの愛を受けてきました。皆さんにお会いしたいけど体力がないし、耳が聴こえにくくなっており、なかなかお会いできません。・・・見えないけれど、たくさんの

愛をいただいていること、感謝します。愛を受けるのは本当に心地よく、この愛を受けることが、また人に愛を伝えることの始まりのように思います。」(榎本てる子 Facebook 投稿 2018 年 4 月 20 日)

てるちゃんが、愛することだけではなく、愛されることをも受け入れたのは、やはり、人との交わりの中で、でした。病院での闘病生活を続ける中で、徐々に身体が自由が利かなくなり、誰かの手助けなしでは寝返りを打つことさえもできないという状況で触れた人たち。自分が「貧しく困って」いる立場のときに、手を差し伸べてくれたお医者さん、看護師さん、ヘルパーさん、家族、友人。その人たちの姿を見て、その人たちの言葉を聴いて、その人たちの手に触れて、その人たちから送られて来るメッセージを目にして、それらの中で、自分が愛されていることを、共同体の中で生かされていることを、知ったというのです。

『ヨハネの手紙Ⅰ』の冒頭には、次のように記されています。「わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について」(1:1)。著者ヨハネが手紙の中で伝える「愛」とは、彼が「聞き、見て、よく見て、手で触れた」ものであったというのです。そして、それが「命の言」、つまり、イエスであると続けられます。愛は、イエスによって示されている。神様の一人子であるイエスは、この世に人として生き、生きることの痛みや苦しみ、悲しみ、弱さやもろさを含め、死に至るまでの命の全行程を生き抜いた。イエス自身が、「肉」となり、人間の身体を持ち、その身体を通して、人々と出会い、人々を見て、人々の言葉を聴いて、人々に触れて触れられて、愛し愛される人であった。そのイエスの姿を見て、よく見て、語った言葉を聞いて、そして、彼の復活に触れて、自分たちは神様の愛を知り、今、それを伝えようとしている。その上で、「互いに愛し合おう」「言葉や口先だけではなく、行いと真実とを持って愛し合おう」と語られます。先の冒頭 1 章 1 節の言葉と併せて読むと、ここには、手紙が書かれてから、約 2000 年後の現代に生きるわたしたちに対する招きのメッセージが込められているように思えます。

イエスが、自らの命を捨てるまで貫き通し、わたしたちに示してくれた愛。筆者ヨハネが聞いて、見て、触れた愛。その愛を、今、わたしたちが、わたしたちのおかれている環境で、わたしたちの作り上げている交わりの中で、この身体で、生身の「肉」で体現していく。弱いから排除するのではなく、弱いから逃げ出すのでもなく、それぞれの弱さを補っていく。違うから恐れて遠ざけるのではなく、違うから恐さの中に閉じこもるのでもなく、心を開いて各々の痛みに寄り添っていく。言葉で言えば簡単だけれども、いざ実行するとなると難しいそのこと。「愛」を実践していく。決して、一人ではなく、「互いに」愛し合う。友人とともに、隣人とともに。同じ時代、同じ空間に生きる、あの人、この人を、互いによく見て、良く聞いて、よく触れて、愛のありかを探り出していく。つながること、集うこと、共にいることが難しくされる、今、この時期だからこそ。イエスが、その命を通して示した「愛」の形を、わたしたちが生きるために必要な愛を、もう一度、大切にしていきたいものです。